

鳥とガキと女は光モンが好きなものだ。

青い透き通った硝子玉を透かして見たり転がして見たりと心奪われていた幼い日、したり顔で嘯いた男の手にはよく手入れされたナイフがあった。器用なもので、男はそれをくるくると手の中で弄んで見せる。その度にチラチラと光が瞬いた。

じゃあそういうお前は鳥か女なのかという憎まれ口は叩く前に馬鹿らしくなった。こいつはガキだ。自分が暇だからガキにちよっかいをかけてくるなんてガキ以外の何者でもない。

ここは自分が大人になってやろうと、男が普段から大切にしているらしい寛大な心とやらを持ってノアは男を無視することに決めた。

そんな可愛げのないガキに対抗心を燃やした大人気ない男に、その決心の二、三分後には硝子玉を放り投げて掴みかかっていたのだけれど。そして呆気なく床に叩きつけられ汚れた頬を拭いながら男を睨

み上げる羽目になるまでがお決まりの流れだった。

視界の端でチラリと何か光ったと認識した瞬間によぎった過去の情景に、ノアはそれが何なのか確かめるのを一瞬躊躇した。より正確に言えば、箱詰めして彼方に追いやって久しい記憶をわざわざ引っ張り出し紐解いた自分が、どうやら変に感傷的になっているらしいことに気が付いて、驚愕と自己嫌悪に陥ったせいで次の行動に迷いが生じた、といったところだろうか。

些かうんざりした面持ちで、しかしやはりそれが何なのか確かめるために手を伸ばした。後から、例えば夜寝る前などに思い出して気を惹かれるのもよろしくない。そんな言い訳をしながら上に積もった枯葉を払いのけ拾ったそれは、ちょうど掌に収まる大きさで、形はこの間新しくオープンしたとかいう八番街の洋菓子屋のショーウインドに飾ってあった焼き菓子のように平たく丸い。

ただ、何かしらの植物——花の意匠が精巧に彫り込まれ、キラキラと眩く光る金色と合わせて、どうにもこうにも恐ろしく高価な物であることが察せられた。分不相応な物に抱く感情は決して歓喜ではない。持ち主は恐らく貴族か、あるいは貴族に売りつける予定のあつた商会か。

見なかつたことにすると迷う時間はなかつた。条件反射でするりとポケットに滑り込ませた手グセの悪さは折り紙付きだ。

上手くやればかなりの額が手に入るかもしれない。しかし、下手をすれば高く売り払うどころか拾つたところを誰かに見られていただけでも面倒な事態を引き起こしかねない。そんなことは重々承知している。売買ルートはいくつか知っているが、安全かと問われればどれも確信があるわけでもない。自ら危険に足を踏み入れる奴はただの物知らずな馬鹿か、あの男のような何かが振り切れた頭の可笑しい奴だ

けだと思つていた。

しかしそれでもどこかに捨てようという気持ちにはなれなかつた。それは眩いばかりの金色に魅入られたか、精巧な細工の下に隠された物への関心か、あるいは——。

拾つたもんは拾つた奴のもんだ——何かにつけ男が口にしていた言葉が頭を回る。

それを振り払うように頭を振つた丁度その時、悲鳴と怒声が耳に飛び込んできた。



イイことを教えてやろう。

大きな仕事を片付けたとかでまとまった金が入つたらしく、酒を煽つてやたらと上機嫌に男が言つた。イイことなんざどうでもいいから、酒と煙草と銃弾に費やすその金の一部でもこつちに回せよと思つ

たことを覚えていた。まあ、弾はいい。仕事道具だ。だが酒と煙草なんて一体何の役にたつというのだ。煙草は服に匂いがつくし煙たいし、酒は男がいつにもまして鬱陶しくなるからうんざりだ。少しは成長期の子供のために栄養になるものを買ってきてくれないのではなにかと心の底から思っていたが、口には出さなかった。

男はノアの親、つまり生産元ではない。ノアを養う義務も義理もないはずで、雨風凌げる屋根を提供されていることだけでも感謝すべきなのだ。といっても、その分こき使われているわけのだけけれど。死ぬよりましだ。たぶん。死んだことがないからよくわからないが。

「興味ねえ。どうでもいいからそこだけ」

どうせまた四番街の金髪の女の胸がでかかったとかどうでもいいことを言いだすのだろうと一言で切つて捨て、掃除の邪魔だとモップで男の足元をつつ

けば、生意気なガキだと言つて拘束された。足も手もでず拘束だけなのだからよほど機嫌が良いらしい。「あ？ 人の好意は素直に受け取るもんだろガキ」ぎりぎり腕で後ろから首を絞められ暴れるが、子供の力などたかが知れている。びくともせずに男は好き勝手に話した。

「お前空の色が何色か知ってるか？」

「は？ 灰色に決まってるんだろ。はやく離せよ」

びしびし腕を叩きながら見上げた男の顔がにっこりやけた。

「ばあか。あんなもん空じゃねえ。『中』のやつらが作ったでえ箱が毎日ひりだすクソみてえなもんだ」男の言っているのは『中』の連中が外にどんどんと作つていく工場の煙突から、もくもくと昼夜吐き出されている煙のことだろう。

「いやクソは空に浮かばねえだろ」

「じゃあ屁だ。なんでもいい。汚ねえゴミだ」